第５９回車座集会意見交換内容（川崎区）

１　開催日時　令和５年５月３０日（火）　午後２時３０分から午後４時３０分まで
２　場　　所　川崎区役所７階会議室
３　参加者等　参加者１１名、傍聴者等１２名　　合計２３名

＜開会＞
司会：定刻となりましたので、ただいまから第５９回車座集会を開会いたします。
　私は、本日の司会を務めます川崎区役所企画課長の成沢と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
　本日の車座集会ですけれども、「川崎区における食料支援を通じたつながりづくりの推進に向けて」をテーマに、地域で活動されている方々やＳＤＧｓパートナーの皆様方と市長とで意見交換を行っていただく内容となっております。
　今回、このテーマを取り上げた経緯と趣旨を簡単にご説明したいと思います。この３年間の新型コロナウイルス感染症対策の影響によって、小・中学校も休校で、給食などの食事が取れなくなる子どもたちがいるなどの課題が明らかになりました。令和３年度と４年度の「地域デザイン会議」の場で、「食料支援を通じたつながりづくり」をテーマに、地域の方々からお話を伺いました。そうしたところ、参加された方から運営上の課題ですとか、地域のつながりづくりに関する意見が出されました。また、こうしたこととは別に、区内には地域貢献に意欲を見せていただいている４００を超えるＳＤＧｓゴールドパートナーの方がいらっしゃいますので、今回の車座集会は地域デザイン会議での話合いをさらに発展させる形で、こども食堂に協力したいと考えている人が協力しやすくなるように、何が必要か、こども食堂の運営上の課題やニーズを分かりやすい形で示せるようにすること。さらに、協力する側もされる側も負担がかからず持続的に行っていけるようにするため、ＳＤＧｓパートナーによる地域内支援へのきっかけづくりですとか、こども食堂が困窮世帯を支援するものというだけではなく、楽しく過ごせるような場所としていくためのきっかけづくり、このようなことを目指して本日はディスカッションできればと考えております。
　それでは、初めに、行政側の出席者をご紹介いたします。福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いします。

司会：続きまして、中山健一川崎区長でございます。

中山区長：どうぞよろしくお願いします。

司会：それでは、初めに福田市長からご挨拶を申し上げます。市長、お願いいたします。

＜市長挨拶＞
市長：改めまして、皆さん、こんにちは。市長の福田紀彦です。
　５９回目の車座集会ということで、コロナの期間は大分この車座集会も止まっていたので、昨年度末ぐらいから随分復活してきて、最終的にこういうふうにできていることを本当にうれしく思っています。
　ここに来る前に、実は社会福祉審議会というものがありまして、そこで委嘱状交付というのがあり、市の福祉計画というのは大体３年ごとに計画を立てていくということになっているんですけれども、３

年前に委嘱したときは、ちょうどコロナの真っただ中で、このコロナの中でどう地域福祉を考えていくのかというのは、ものすごく計画が立てづらいという、そういう時代だったんですね。

今回、コロナから３年間でいろいろな変化があったものをどうまた次につなげていくのかというのが議論の始まりなんですけど、実はさっき紹介があったように、５年前もこども食堂をテーマに車座集会をやって、それこそ江良さんとか鈴木さんとかにも５年前にもお世話になりました。

その当時は、後で説明があるでしょうけど、こども食堂もそれほど多くなかったんです。７０ぐらいでしたっけ、佐藤さん。もう３倍以上に市内に増えているということで、ただ、コロナの中でいろいろなことがあったと思います。これから、いろいろなパートナーの皆さんと一緒にどうつながっていく場所をつくっていくのかというのを、みんなで考えていければと思っております。

それぞれの立場からいろいろな意見を重ね合わせて、面白いあるいは持続可能な取組につなげていければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：ありがとうございました。

それでは、本日の進め方についてご説明いたします。

初めに、本日ご参加の皆様に簡単に１分ぐらいで自己紹介をしていただきます。その後、今日のディスカッションをより実りあるものにするため、川崎市内のこども食堂の内容ですとか現状について、かわさきこども食堂ネットワーク代表の佐藤由加里様にご説明いただいた後、それぞれのこども食堂運営団体や中間支援団体の方に現在の活動内容ですとか、感じている内容などについてお話しいただきたいと思います。その後、福田市長をファシリテーターとする意見交換に移ります。

最初は、「こども食堂のニーズ等に対して何かできそうなこと」をテーマに、ＳＤＧｓパートナーの皆様にお考えやアイデア等についてご感想をいただき、意見交換していただきたいと思います。

引き続いて、「子どもにとって来たくなる場所となるために何か工夫できること」をテーマに、食料支援に限らず、子どもたちが来たくなる場所となるようなアイデアですとか、こんなことができるといったことについて、それぞれのお立場から意見交換をしていただければと思っております。

それでは、名簿の順に自己紹介をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

＜自己紹介＞

大竹さん：皆さん、こんにちは。川崎区社会福祉協議会の大竹と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

社会福祉協議会ですけれども、平成３０年、前回の会議に引き続いて参加させていただいております。ありがとうございます。

社協、その名のとおり、地域の皆さんと協議をしながらいろいろなことを決めて進めていく団体でございます。本日、車座ということで、ＳＤＧｓの関連企業の皆様、日頃からいろいろな活動をされている、食料のほうの活動をされている皆さんと、こうやって一堂に会することができていろいろなものを持ち帰れればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

佐藤（祐）さん：皆様、こんにちは。いつもお世話になっております。川崎区社会福祉協議会の佐藤祐佳と申します。

私は冒頭の説明の中でもありましたが、川崎区のこどもの食料支援ということで、江良さんや健さんたちと連携をさせていただきながら、コロナ禍で支援を進めさせていただいております。今日は、新しいＳＤＧｓパートナーの皆さんや、かわさきこども食堂ネットワークの佐藤さんなどとまたつながりを持って、今後に発展をさせていく機会になれば思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

江良さん：皆様、こんにちは。たじま家庭支援センターの江良と申します。

こども食堂を始めまして、健さんのところと同じなのですが、８年目を迎えます。この８年間のうち３年間はコロナということで、大分こども食堂の運営が変わってきまして、やはり共生食堂、子ども、大人を含めた居場所ということを念頭に、今活動しているところでございます。そういう意味では、ＳＤＧｓのお考えを含めたところで、企業の皆様なくしてはこども食堂を含めて成り立ちませんので、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。今日はよろしくお願いいたします。

鈴木さん：桜本こども食堂の鈴木と申します。

今日は、桜本こども食堂、そして私が所属している社会福祉法人青丘社を中心として食を通じた取組をご紹介させていただきたいと思います。

この３年間は、コロナ、本当に大変でしたね。僕たちも大変だったし、いろいろな方が大変だったと思います。でも、大変だからこそ、いろいろな地域のニーズや、これからの川崎の新しい希望をつくっていくチャンスと思って、いろいろなことに取り組んできました。

今日、こういった機会で企業の皆様と一緒になってこの新しい川崎のＳＤＧｓを含めた姿を夢見られればいいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

朴さん：こども食堂さららをやっています。いきがい工房さららの朴といいます。よろしくお願いします。

私たちは、まちの小さなカフェを利用して、地域につながるには何ができるかということをいろいろと模索しています。コロナの中で、こども食堂をすごくやりたかったんですけど、場所がないという状況のとき、お弁当配食を江良さんのところとか健さんのところがやっているという情報を得て、お弁当ならやれるということでお弁当配食のほうをやって、今は子育て中のママたちと、地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちが独りで食べるからという声を聞くと、じゃあ、いいよ、こども食堂だけどいいよというふうにしながらやっています。

名前をこどもから変えようかな、お仲間食堂かなとか、いろいろ考えながら、小さな団体なので、いろいろなことを模索しながらやっています。よろしくお願いします。

佐藤（由）さん：かわさきこども食堂ネットワークの佐藤と申します。今日はお招きいただきありがとうございます。

私は、２０１７年から高津区で菜の花ダイニングというこども食堂を始めておりまして、そちらのほうは気がついたら約６年経つのだと、しみじみと思ったところです。自分たちが始めたときには桜本さんとかはもう大先輩で、何とかして見学に行けないかと思っていたことも今懐かしく思います。２０１７年にかわさき市民しきんさんが市内のこども食堂を調べるということで、１７か所あった団体の集まりがあったんですけれども、それをきっかけに、これは１回で終わっちゃうのはもったいないから、何とか横のつながりができないだろうか。その頃はまだコロナのコの字もなかった頃なので、せいぜい１年に１回か２回ぐらいみんなで集まってお茶でも飲みながら、お米は足りているとか、おしょうゆはあるとか、本当の近所のおばちゃんたちの井戸端会議みたいなことをしながら交流を深めていけたらと思っていたんですけれども、結成してすぐ位に、コロナというのがやってきて、大変になって今に至っているということです。今日はよろしくお願いいたします。

山田さん：川崎信用金庫総合企画部の山田です。よろしくお願いいたします。

当金庫は、フードドライブだったり、社内にある備蓄品だったり、そういったものを通じて子どもた

ちの食料支援等を行っております。ただ、こども食堂ネットワークの佐藤さんとか、そういった方たちといろいろお話を伺う中で、まだまだ私たちの知らない課題がたくさんあると、新たな取組、課題解決について取り組むことをやっていきたいと、日々いろいろと考えているところです。

また、当金庫と川崎市で川崎市ＳＤＧｓプラットフォームの共同の事務局を務めておりまして、当金庫自身の取組だけではなくて、市内の事業者さん、皆さんのそういった活動の促進をどう進められるかというのを市と連携して進めているところでございます。よろしくお願いいたします。

澄川さん：澄川法律事務所の弁護士の澄川と申します。

私は、コロナが始まった１年目に周辺の飲食店がすごく苦境に陥りまして、ただ、苦境に陥りながらもテイクアウトを始めたり、いろいろな工夫をされていて、それを見て、あ、これとこども食堂を組み合わせると何かできるかなと思いまして、それで寄附を募って、その寄附金でテイクアウトの食事を提供してもらって、それを子どもたちが取りに来ると、そういう活動を何度かさせていただきました。

そうした活動を通じて、こども食堂という言葉を出すと、皆さんの食いつきがよくて、いろいろな地域の皆さんがすごく積極的に乗ってきてくれるというのを非常に実感しました。そういうこともありまして、今、ゴールドパートナーで分科会に参加させていただいております。今日は刺激的な話をいろいろ楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

井上さん：皆さん、こんにちは。ＴＭＣシステムの井上と申します。

私どもの会社は、お客様からご依頼を受けて機械を作ったり、あとはシステムを作ったり、ホームページを作ったりと、そういった仕事をしています。今回、ご縁がありまして、川崎市のゴールドパートナーに入りまして、川崎信用金庫さんの分科会、私どもも参加させていただいたのですけれど、私たちが持っている力はエンジニアリングですので、社会の課題をエンジニアリングで解決していく、そのためには現場に飛び出してどんな問題があるかというのを見ていこうということで、今回参加させていただきました。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

岩さん：今日はお声がけいただきありがとうございます。美遊ＪＡＰＡＮ有限会社、岩と申します。

川崎の大川町という埋立地があるんですけれども、そこで私の祖父の代から金属加工業をやらせていただいております。母がやっております美遊ＪＡＰＡＮ、Ｋｉｔｃｈｅｎ美遊ですね、そちらの飲食事業を始めてから、かれこれ１４年目になります。

令和３年のモデル事業に採択いただきまして、川崎市内の農家さんからお野菜をお預かりして、また静岡のやさいバス株式会社さんにお声がけして、南北の流通をつくりながら、弊社で小ロットの商品開発、野菜であれば乾燥したり加工したり粉末化したりということで、賞味期限を延ばすこともそうですけど、付加価値をつけて新しいものとしてお客さんに提供すること、そういったことを事業としてやっております。

私自身、まだまだこども食堂をよく理解できていないんですけれども、川崎で長く育てていただいておる事業者ですので、これを機にいろいろと接点を持たせていただきながら恩返しできればと思っております。よろしくお願いいたします。

高山さん：こんにちは。初めて参加をさせていただきます冠婚葬祭互助会の株式会社セレモニアでございます。

私どもは５、６年ほど前から大家族ふるさと食堂さんの支援をさせていただいております。コロナが始まった時点で、ちょっとお子さんたちをお集めするのが難しくなりましたので、今現在はお弁当のデ

リバリーというか、お渡しをするお手伝いをさせていただいております。仕出し部がありますので、お料理を作って、それをお持ちして対応していただくことで協力させていただいている会社ですので、ご承知おきいただければと思います。よろしくお願いします。

＜テーマに関する説明＞

司会：皆様、ありがとうございました。

それでは、初めに、川崎市内のこども食堂の概要や現状などについて、かわさきこども食堂ネットワーク代表の佐藤由加里様にご説明いただきたいと思います。それでは、佐藤さん、よろしくお願いいたします。

佐藤（由）さん：こんにちは。それでは、川崎区における食料支援を通じたつながりづくりの推進に向けてということで、こども食堂を例に取った食支援を通じたつながりづくりについての説明をさせていただければと思います。

まず、川崎区内にどれだけこども食堂があるのだろうかということですけれども、（資料で）こども食堂というおうちみたいな形がついているのは、かわさきこども食堂ネットワークに参加してくださっているところです。今日来ていただいているてんとう虫ハウスさん、桜本こども食堂さん、さららさん、今日は開催日で行けないんだよと言っている大家族ふるさと食堂さんの４つにおうちのマークがついています。私が何となく地図で示したので、実際はちょっと違うというのはご容赦いただきたいと思います。

そのほかに星マークが４つあるんですけれども、私が調べた段階で、こども食堂をやっているということは確認が取れているんですけれども、残念ながらまだネットワークに参加していただけていないところが４つあります。説明すると、わいわいキッチンさんと大師新生教会こども食堂さんと、大師稲荷神社こども食堂さん、ＳＯＭＰＯ流こども食堂さんというところの４つがあるのではなかろうかというところが確認できています。

では、全国のこども食堂と川崎市内または川崎区内は先ほど言ったので、どんな比率になっているかというところですが、川崎市内に限って言えば、２０１７年には１７か所でした。どんどん増えていって、２０２２年の１２月に調べた段階では、７０か所が確認できています。７０か所のうちには、今休止しているところも入っておりますので、全部が活発に活動しているというわけではないということをご承知おきください。その後にも入りたいとか、参加したいというところがあるので、５月で調べればもうちょっと増えているのかなと思っております。全国には７，３６３か所、神奈川県内には４２６か所のこども食堂の存在が確認できています。

どんな団体がやっているのかということですけれども、任意団体が約５割です。そのほか、ＮＰＯさんとか社会福祉法人さんがやっているところが２４％、すみません、これは川崎市内の数字です。場所は、自己所有の場所が３８％で、地域のカフェとかがやっているのが２４％、市民館でやっているのが１５％ぐらいの割合になります。

川崎区内は、川崎市内全体の約１２％になります。ほかのところで、川崎市内で何区に何か所あるよという話をすると、川崎区が一番多いんじゃないのみたいな話をされるのですが、川崎市内で活動件数が１番多いのは多摩区になります。その次に中原区、高津区と続きます。これはただ単に、所得に応じて数が多いというわけではなくて、どれだけ市民団体としての活動人口が多いかということだけなので、こども食堂の数と、俗に言う世帯の平均所得との比例は関係ないと考えてください。

こども食堂の運営には、何が必要かというと、当然食材は必要ですし、消耗品とか広報用品とか、場所として市民館とかお寺とか教会とかＮＰＯが持っている施設とか、そういうものが必要になります。

参加者はどんなところから、どんな人が来るのだろうということですけれども、親子で参加とか、子どもだけとか、祖父母と一緒にという方が多いです。地域の高齢者も、先ほどさららさんの説明にあったように、いいよいいよ、おいでよというところがほとんどです。こども食堂とついておりますが、基本的に皆さん誰が来てもいいということと、厚労省の指針でこども食堂とはというのは、低額または無料で食料を提供していることで、子どもが１人で行っても安心できるというところでこども食堂となっています。

参加者の方は大体自転車とか歩きとかで来るので、徒歩だと１５分ぐらい。大体３キロ圏内が限度というところと、口コミで広がっているのが１番でございます。

つながりづくりというところですけれども、コロナ禍で食料がすごく増えてきました。川崎フロンターレさんが全面的にかわさきこども食堂ネットワークを応援してくださって、いろいろなことが増えてきています。行政の方も応援してくださっています。かわさきこども食堂ネットワークは、それらの方たちからいろいろと来た支援情報を基に、富士通さんにお願いしたり、川崎フロンターレさんの事務所にお願いしたりして、一時請けをし、その後、皆さんの希望を募ったものをそれぞれのところに届くように調整をしながらお渡ししております。

昨年は、全部で約１７トン、去年の８月から始まった川崎フロンターレの支援に関して言えば、１７トンのうちの約５トンが皆さんのところに届いているということになります。私がかわさきこども食堂ネットワークとしてできるのは、こども食堂まで届けることなので、そのこども食堂に様々なステークホルダーを持った方たちが来ることで、いろいろな食料であったり、日用品であったりというものが届けられていると考えております。

左下の図の左側が、川崎フロンターレさんを介していろいろ頂いたものの一例です。右側は、それ以外の方から頂いたものになります。かわさきこども食堂ネットワークだけに来たのが約７トン、また今年はもう約２トンの支援が、昨日計算したらそのぐらいの数来ているので、年々増えていっているのでまた今年度もいっぱい増えるんだろうなというふうに思っています。

ネットワークができることは情報を集めてみんなに届けるということだけなので、その後のこともありますので、いろいろな企業の方と協力して今後も続けていければと思います。以上です。

司会：ありがとうございました。短い時間の中で分かりやすい説明をありがとうございました。

それでは、次にこども食堂運営団体ですとか、中間支援団体の方に、現在の活動内容や感じる課題などについてお話しいただきます。

初めに、てんとう虫ハウスの江良様、よろしくお願いいたします。

江良さん：では、改めて、てんとう虫ハウスの江良と申します。よろしくお願いいたします。

こども食堂ということで、前にもお話ししましたけど、私、勉強不足だったものですから、その当時はやはり貧困家庭をターゲットというようなイメージが強かったもので、２８年７月、子どもと考えて「てんとう虫」という名前にしました。それから、子どもにこども食堂あるよといっても、えっ、というような顔をしています。てんとう虫あるよというと、分かった、行くよというようなことになっております。今のところ、始めた当初は、月に１回程度でございましたけれども、やはり地域の家庭の状況を見ましたときに、月に２回という形で定例化しております。ただ、コロナ禍はやはり学校が休校になっておりましたので、そのときは学習支援も兼ねて毎日子どもは通ってきておりました。私の出勤状況よりもよくて、皆さん皆勤賞です。２０日間は来ていました。９時出勤５時退勤というような形で子どもが来ていたような状況でございます。

てんとう虫ハウスといいましても、先ほどもありましたけれども、共生食堂ということで、子どもか

ら大人、高齢者、また障害をお持ちの方もご参加をいただく、参加の仕方については、一緒に食事を食べていただくことも１つですし、または調理をしていただく、メニューを考えていただく、昨年の９月から、なかなか当施設にお越しいただくことが難しい家庭に関しては配食サービスを始めました。最初は、子どもにお弁当を渡すというのはすごく不安だったんですね。自転車にぽんとお弁当を置いて遊びに行っちゃって、３時間、４時間後に食べられては食中毒、これは１番こども食堂にあってはいけないことなので、家庭に届けることにしました。今は、参加者が５０名いるとすると２５食ぐらいが家庭にお食事を届けるような形になっております。

あとは、参加費ですけど、大人も子どもも一応１００円を頂いておりますけれども、なかなか１００円が持ってこられない家庭のお子さんもいるんですね。そういうときはお名前だけ書いてねと言って、ちょこっと私が、私のお小遣いが減るんですけども、１００円を握りしめてもらって１００円を貯金箱に入れてもらうような形を取っています。

一応アレルギーの問題等もありますので、高学年になれば自分が食べていいもの、悪いものが分かるんですけれども、低学年のうちですと分かりませんので、保護者の方にアレルギーの有無を確認させていただいているような状況になってございます。

ということで、食料を本当に地域の方、また企業さんも含めて頂戴しているもので運営をさせていただいています。大体１食実単価が３００円ぐらいで運用していますので、たまにちょっといいものにすると５００円、６００円かかってしまって、ちょっと私の上長から怒られることもありますけれども、これは目をつぶって運用したいと思っております。

ぜひともまた機会がありましたらお越しいただくのと、関心を示していただいて、何かの折にご頂戴できるものがありましたら、特に食料をお待ちしておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

今日はこの場を借りまして、ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。

続いて、桜本こども食堂の鈴木様、よろしくお願いいたします。

鈴木さん：改めまして、桜本こども食堂の鈴木です。

今日は、社会福祉法人青丘社、そして地域の桜本こども食堂の食を通じた様々な取組をご紹介させていただければと思います。

これは、ふれあい館桜本こども文化センターですね。地域の児童館ですので、地域の子どもたちがふだんからたくさんたくさん遊びに来るんですね。その中で、やはり児童館としていろいろな地域の子どもを受け入れるだけでなく、川崎区ならではの外国につながる子であるとか、やはり生活が大変な状況にある子ども、家庭が川崎区にたくさんいらっしゃいます。そういった家庭の子どもたちの居場所づくり、そして支援を展開していっています。

高校では、市立川崎高校の定時制でぽちっとカフェというカフェをやっていまして、そこでもコロナ禍で飲食ができなかったので食料支援をやっています。

そうした中で、コロナに入ってこれは大変だと思いましたね。そして、かわさきこども食堂ネットワークさんですとか、いろいろなところにご相談をして食料を集めて、とにかく区内の子どもたち、家庭を見守ろうというので食料支援を始めました。

食料を配付して、結局、最終的にどうなっていったかというと、それで本当に助かった家庭もたくさんありました。ただ、特に思春期の子どもたち、もう家には居場所がないし、お母さんとの関係がもうすごく悪くなっちゃっているという場合に、食料支援をしてもそれが子どもたちの御飯につながっていかないとか、持っていった食料が実は腐ってしまったとかというのがあったので、だったら、ふれあい

館は調理室があるので、そこで自分たちで料理を作ってみんなで食べようというクッキングナイトという取組を始めたところ、これがとてもいい感じなんですね。子どもたちのいい居場所づくりになっています。

そうした取組をしていたんですけれども、私たちは桜本で、やはり私たちだけじゃなくて地域の方たちと一緒に地域に開かれた形での子どもの居場所づくりをしたいと思うようになって、２０１６年から法人としての桜本こども食堂を始め、そして２０１９年だったか、１８年だったか、地域で住民の方々と一緒に実行委員会をつくって、桜本こども食堂を地域の方主体でやるようになりました。

コロナ前は、こうやって楽しいこども食堂だったんですけれども、それがコロナ禍、お弁当の配付形式になってしまいました。ただ、これがあさってから３年ぶりに会食形式でのこども食堂に戻ります。お弁当形式でやったときには、とても家庭が助かったという、そしてこども食堂、会食形式は子どもが集まってみんなが楽しいというところ、その２つのニーズがあって、会食形式になるとお弁当食堂の家庭が助かるというニーズをどうやって満たしていったらいいのか、ちょっと今手探りで悩んでいるところです。

同時に、ふれあい館で始めた食料支援も、やはり地域の人たちが地域を上げて支えて継続をしたいというので、こども食堂の方々が、月１回桜本フードパントリーと称して食料支援をしてくださっています。

こういうふうにして、たくさんの方が来てくださっています。やはり川崎区ならではの外国籍の住民の方々がとても多いです。そして同時に、私たちのフードパントリー、地域の子どもたちがたくさん手伝ってくれているんです。子どもがこうやってまちづくりに参加をするいうのは、とても大きいですね。子どものためにじゃなくて、子どもとともに一緒にやっていく地域づくりというふうに感じています。

最後まとめさせていただきます。食を通じた子どもの居場所づくりって、私、ＮＰＯ法人たまりばの西野さん、私の師匠みたいな人なんですけれど、すごく学ばさせていただいて、やはりこれがいいですね。とてもすてきです。こういったものがもっともっと広がっていけばいいというのと、やっぱり子ども支援、家族支援において食をするというのはとても効果的だと感じました。そして、今日皆さん同じような話題になると思うんですけれども、こども食堂、フードパントリーなど、地域に開かれた食を通じた取組というのは、子どもとボランティアさんとかの出会いの場になっているんですよね。それというのは、本当にまちづくりの取組だというふうに感じています。

以上で終わりにします。ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。

続いて、こども食堂さららの朴様、よろしくお願いいたします。

朴さん：こども食堂さららです。ここはいきがい工房さららというちょっと元気な高齢者がボランティアグループをつくって始めています。おいしそうでしょう。

浜町一丁目の浜町商店街の入り口に三角形の小さな、本当に小さなお店があるんですけども、そこでおむすびカフェさららというのが行われています。そこにいろいろ集まってくる元気のいい、特に女性が多いんですけれど、子どもたちのために何かとか、地域とつながることは何かないかなということでボランティア活動を始めています。

どんなことやっているかというと、まず１番最初に思ったのは、保育園は朝７時からやっているんですけど、学校は朝８時からなんですよね。７時から保育園に来ていた子たちが学校には８時に行くときに、お母さんお父さんが８時まで仕事に行くのをやめることができるかというと、できないんです。この１時間はすごく大きな差があって、ここを見守ることができないかなといって始めたボランティアな

んですね。何せ高齢者は朝早いですから、もう朝７時なんか大丈夫よということで始まって、子どもの見守りから始めていきました。

そこから、何がほかにできるかな、こども食堂というのがあるね。でも、場所が狭いからということで、お弁当配食にしようと。それから、去年からちょっと自信がついてきたので、フードパントリーを始めています。これは田島支所の家庭支援の方たちとケースワーカーの方とつながって、独り親家庭に限ってやらせていただいています。それと、夜には塾に行かれない子たちがいっぱいいますので、勉強をちょっと見ようかなということと、それから高齢者のボランティアさんの中に何とおもちゃインストラクターの方がいらっしゃって、じゃあ、おもちゃ広場を始めようということでおもちゃを地域に開放したりしています。あと、子どもを産んだ後も保育園に送っていかなきゃいけない。今は、産んですぐ１か月でお母さんたち外に出られるんですよね。年寄りから見ると、そんなことはあり得ないじゃないですか。聞いたら、だって私しかいないでしょうということなので、じゃあ、送っていくことを私たちがやれるよという感じで自分たちにできるボランティア活動をやっています。

こども食堂にいきます。こども食堂は、毎月第４金曜日にお弁当形式でしています。子育てママたちと、それから高齢者の方たちが中心にやっています。大抵忙しいので、ママたちが取りに来るんですけれど、この頃はママたちが自分のお子さんを連れてきて、何か卒園した後に久しぶりに会ったね、みたいな感じでつながりをまた持ってきてくださっています。

あと、フードパントリーは随時品物が入ったときに、公式ＬＩＮＥでつなげていますので、そこでこんなものが入りましたよ、と取りに来られる方に声をかけて来ていただいています。ここに関しては独り親家庭に限らせてもらっています。

でも、これはこども食堂をやっているから情報が入ってくるんです。お母さんたち同士から、あそこのうちは、私たちよりもちょっと大変かもしれないという情報をいただけると、じゃあ、このＬＩＮＥを教えてあげてくださいというふうにしています。あと、そのママたちの情報から、うちの勤めているところで何か食料をくれるかもしれないよ、行ってみる？みたいな感じで紹介していただいて、そこの企業の方と会って支援をしていただいたりというようなことが少しずつ広がってきています。

司会：ありがとうございました。

続いて、川崎区社会福祉協議会の大竹様、よろしくお願いいたします。

大竹さん：改めまして川崎区社会福祉協議会でございます。ありがとうございます。

社協では、直接的なこども食堂の運営というのは、実は区の社会福祉協議会はやっておりませんので、いろいろ聞きかじったことなどをお伝えしていくことになるかと思います。

平成２９年頃から、こども食堂をやってみたいななんていう相談が結構区社協のほうに入ることになりまして、平成３０年には６か所ぐらいこども食堂が動いていたと思います。その後、コロナ禍で地域の様々な活動が停滞していくということになっておりましたが、区内の地区の社会福祉協議会では、大師第一地区社協の「にこにこだるまさん」というのと、あと中央第二地区社協「わいわいキッチン」というのがこども食堂の活動を社協ではしています。最近コロナが第５類に変更となって、様々な地域活動が再開の機運となってきています。そういった中で、食料を通じた地域支援というのが地区社協の中でもとても効果があるという認識になっておりまして、じゃあ、我々もやってみようという感じで、相互に情報交換しながら、こども食堂や、食料支援といったようなところで、活動が広がりを見せてきているところでございます。

例えば、食料配付、フードパントリーというところで、みんなの御飯というのがあります。地域の子どもたちが誰でも参加できるようにして、地域の方と子どもたちの遊びや食料を通じた交流を図りまし

て、見守りとかつながりの機会をつくっていくといったようなこと、また、関係機関のヒアリングの結果から、親が調理できない世帯があるといったようなニーズが上がっておりました。子どもたちと一緒に御飯を炊いておにぎりを握るおにぎりキャラバンといったようなものも開催をしております。

区社協では、いろいろな広がりをいかにスムーズにスタートアップさせて、その後軌道に乗せていくかが役割かと思っております。社協は、様々な団体の協議体ですので、関連団体といろいろ相談をしながら、また情報を教えていただきながら、いろいろな面で関わらせていただいております。

実際、支援をしてよかった、また受ける方も支援を受けてよかったといったような、お互いがそう思えるような楽しい取組、企画を増やしていくことが、こういった活動の継続の大切な肝かと思っているところでございます。

社協としてできること、例えば、食料の安定的な確保を目指したＳＤＧｓパートナーの皆様をはじめとした地域の企業であるとか、社会福祉法人施設、地域住民との顔の見える関係づくり、また食料の供給量であるとか、在庫を抱えると大変なことになってしまうので、在庫の管理といったところ、また、今取り組んでいること、これをいかに周知していくか、アピールですね、そういったことも大切だと思っております。また、主に学校関係との連携であるとか、アプローチ、また、地域のネットワークづくりなども大切なところで、社協でやらせていただいています。

社協は、地域福祉活動計画の基本理念、区と同じですけれども、「つながりを育て安心して暮らせるまち川崎区」の実現のために、食料というツールを活用したこども食堂をはじめとした地域福祉の推進のために皆様と連携しながらやっているところでございます。

簡単ではございますが、以上でございます。ありがとうございます。

＜意見交換＞

司会：皆様、ありがとうございました。

それでは、ここからは参加者の皆様からいただいた意見とか課題とか、いろいろなものを踏まえまして、市長との意見交換に移らせていただきたいと思います。

それでは、福田市長、よろしくお願いいたします。

市長：皆様、発表ありがとうございました。

自己紹介からそれぞれの発表をいただいて、あ、こんなこともやっておられるんだと。コロナ禍で従来のやり方はできなかったけれども、違う方法で、やれる形で続けてきていただいたということに改めて感謝申し上げたいと思います。

まず、佐藤さんから市内の状況などを聞かせていただきましたけれど、全国で７，３００ぐらいあると。川崎市の人口は大体全国の１％ちょっとということですから、７０団体というと大体人口に比例しているのかなと思いました。７０というのは、登録していないところも含めて７０あるということですね。

佐藤（由）さん：そうです。

市長：そうですか。ありがとうございます。

幾つか何かすごくいいすてきなキーワードが出てきました。皆さんから、やはり食というのは、人をつなげる非常に重要なツールというか、大事なツールになる。パワフルなツールだというような言葉があって、本当にそうだなと思います。

それから、こういったこども食堂、居場所づくり、まちづくりそのものだというような話もあったと

思います。そんなところに、僕は澄川さんがまちづくりそのものですよねというような話をされたときに、非常に大きくうなずいていたのが印象的でして、まずＳＤＧｓパートナーに加わっていただいている皆さんから少しご意見をいただきたいと思っています。

ありがたいことに、川崎信用金庫さんから山田さん、今日参加していただいておりますけれども、さっきご紹介があったように、ＳＤＧｓプラットフォームの共同事務局を川崎市と川崎信用金庫さんが共同でやらせていただいていることによって、実はすごく企業の皆さんに声がけをしていただいているんですよね。なので、３，０００社を超えるという、全国でこんなに加盟しているプラットフォームはないと思っていますが、そういった意味で、その中でも子どもに関して意識を持っていただいている企業の皆さんに今日はお集まりいただいていると思っております。

さあ、今までのところで聞いてみて、澄川さん、大きくうなずいておられましたけど、何か感想だとか、あるいは自分たちはこんなこともやっているけど、こんなことをこれからもできるみたいな話がありましたら、お話を伺えればと思いますけれど、いかがでしょうか。

澄川さん：皆さんのお話を伺って、市長と同じように、やはりとても共通する部分、地域でのつながりづくりというところは非常に深く感じました。

私、川崎市内でずっと生活をしていて、いろいろな地域活動を見てきていますけれども、やはり食というのもあるし、あと川崎という地域、ある意味すごく狭さもありますけれども、ものすごく人と人のつながりが強いところだと感じています。その中で、さらにそこを楽しい形でくっつけていくために、やはり食というのが、子どもも当然そうですけれども、実際にそこを提供していく側も、やはり食という楽しいものを通じてやっていくというのは、今後、ものすごくキーになるのではないかと、改めて感じました。

市長：先ほど澄川さんのやってこられた取組というのは、僕、ものすごく面白いと思ったんです。協賛いただいてご寄附をいただいたものを、同じように困っておられる飲食店のテイクアウトというふうなのをある意味で購入してそれをまた渡す、そして、子どもたちは喜ぶという、何かみんな三方よしですよね。

澄川さん：そうですね。

市長：単純にお金を渡すというよりも、困っている飲食店をかますことによってということですよね。

澄川さん：こども食堂をやるに当たって、設備を整えて調理施設があって、作る人がいて、食材が要って、さらに食中毒の心配をしてとなると結構大変なんですけれども、それが全部そろっているのが飲食店なんですね。そこをプロがやっている。しかも困っていると。さらに、そこに子どもに提供しますというと、割とつながっている人がどんどん寄附をしてくれるというのがあって、そこはコロナ禍という状況下ではありましたけれども、すごく私が思ったよりスムーズにつながっていったと、そういう印象です。

市長：これ、寄附を集めるというのは、どういうふうにお願いするというか、どういうつてを頼ってとかというのはありますか。

澄川さん：そこは大がかりにはできないので、フェイスブックで呼びかけて、知り合いの経営者、知り合いの士業だとか、そういうところから個人であれば１万円とか、割とその余力があるところは１０万円とか寄附してくれたりとか、そういった形でした。

市長：ありがとうございます。

今、地ケアの話をして市でプラットフォームをつくっていますが、１００以上の団体に加盟していただいているんですね。企業の皆さんもいっぱい入っていただいてますが、地域包括ケアシステム＝福祉の話でしょうとなってしまうと、私の企業はあまり関係ないというふうになってしまうのですけれど、実は自分たちのサービスが地域のつながりになるという観点から見ていただくと、意外とうちでやれることはありますという企業さんが結構あるんですよね。だから、福祉だとかというふうな切り口ではなくて、地域のつながりをつくっていく、あるいは、地域の人たちに私たちが提供できるサービスは何があるかなということから考えていただくと、実は結構広がりが出てくるのではないかと、地ケアの会議もそういう意味で盛り上がっています。

では、井上さんは先ほどエンジニアの力でというお話があって、今、皆さんからこういう活動をしていて、ニーズもということでありますけども、何かこういうことができるのではないかと感じられたことってありますか。

井上さん：今回参加させていただいて、課題はいっぱいあるということがよく分かりました。多分見えていないことでもたくさんあると思いますけど、例えば、今回、物資、食料を集めるときに、どのように集めるかですね。配送の部分であるとか、保管の部分であるとか、あとは仕分けの部分であるとか、人を介してすごく手間がかかるということが分かりました。そこは、できるだけ人が入らないでシステムに任せていくと、楽に、細かなものも集めてこられるというような、そんな形になるんじゃないかと思って見させていただきました。

市長：ありがとうございます。

佐藤さん、この寄附していただく、提供していただくところと、こども食堂との間のところが結構難しいですよね。

佐藤（由）さん：はい、おっしゃるとおりで、コーディネートしないとうまくものが運ばれていかない。大きな企業さんから来ているのは、例えば店頭に並べられない３か月ルールとか、３分の１ルールという、詳しくは分からないんですけれども、賞味期限に対してというところがあって、それを送ってあげるよというときは、できれば１０トン車を横づけしたいというのが企業の希望ですね。こっちは無理だというところがあるので、その折り合い交渉というのもありますし、今、井上さんが言われたように、フードドライブ品というのは実は本当に細かくて、それこそそれだけでＰＯＳレジみたいなものがあって、在庫管理ができるようなシステムが受け入れられて、倉庫があって、受入れ担当の人がいれば、もうそれはまさしくフードバンク事業になるんですけれども、そこまでやらないとまず来たものの受入れができない。その後に、じゃあ、川崎区の分はこれだけとか、例えば江良さんとか朴さんとか健さんとかがお見えになって、頂戴といったときに、何が何個あって、賞味期限がいつまでで、どういう梱包形態になっていてというのが一覧表になるというのは、それはできたらすばらしいと思うんですけれども、それを無償でというのはきっと難しいと思っております。

現在は、もう何が来るよというのが分かっている、だからフードドライブはネットワークでは取り扱わずに、何が何個とある程度分かっているロットのものに関して、いついつ来そうだよということと同時に、受入れの場所であったりとか、各こども食堂さんに、こんなのが来ているから入れてちょうだいということをやって、その後、輸送の手配も考えてやっているというのが現状です。

１番困るのは、防災備蓄品がいっぱいあるからもらってくれないか、アルファ化米が一気に５０食で

きるんだけど、その箱が１００箱あるんだけどとか、１，０００箱あるんだけどというのが入替えの時期に定期的にやってくるのですが、できればみんな食べておいしいものが欲しいので、防災備蓄品も確かに大事だけれども、普通に食べておいしいものを頂戴ということは常々言っています。

市長：そうですよね。大事な話ですね。いや、実は本当にこの在庫管理と配送、保管、これのマッチングというのがものすごく大変で、僕たちの行政でもこの話をどうやったらうまくできるんだろうという、それこそ民間の皆さんの力をお借りしてということを検討しているんですけれども、まだまだ課題はたくさんあって、うまくできていない部分があるんですけども、今、佐藤さんがおっしゃっていただいたように、一部でもそういうシステムがあるとすごく助かってくる話なので、井上さんのところで、もう少し深くいろいろ相談に乗っていただければありがたいと思います。

さあ、もっと聞いていきたいと思います。岩さん、いかがでしょうか。

岩さん：ありがとうございます。そうですね、弊社は飲食とあと南北の農家さんからの野菜の流通をやっています。こども食堂に関して思っていたのは、いわゆる魚を釣って渡すのではなくて、魚の釣り方を教えてあげるということが子どもにとっても地域にとっても大事だと思っている中で、皆さん実際そういう活動をされているというところを非常に勉強させていただけると思いました。まずは、皆さんのこども食堂に遊びに行きたいと思っています。

そんな中で、弊社の事業としてどう絡めていけるかを、今考えながらお話を伺っていたんですけれども、農家さんにしてみると、どうしてもＡ品、Ｂ品と出てきます。直売所でＡ、Ｂともに並べたときに、やっぱり消費者としてはＢを買っていくんですね。そうすると、Ａ品の野菜の価値も下がってしまう。だから、中にはＢ品の野菜は捨ててしまう方々もいらっしゃいます。けれど、それを大きい声で言ってしまうと、飲食店の方だったりが、じゃあ頂戴よとか、安く売ってよ、と。それは、元も子もない。農家さんからすればちょっと形が悪くても同じだけの労力と思いを込めて作ったお野菜なので、それを譲るというのはおかしな話だとなってしまいます。

弊社としては、農家さんとのやり取りの中で、では、そのＢ品というものをお預かりして、加工してお野菜とは違う形で提供することで、Ａ品の野菜プラスそうではないＡ品の加工品というものを作り上げることができるのではないかということでやり取りをさせていただいています。

単純に、乾燥野菜ということであれば、保存は２年ぐらい利きます。生の野菜、皆さんもらっても多分困りますよね。なかなかもたなくて、冷蔵庫に入れても１週間、２週間とか、冷凍すると味も変わっちゃうし。でも、もちろん配送と加工というところは必要になってきますけれども、野菜を切って乾燥させておくとその後いろいろな使い方ができる、今日も後ろに乾燥野菜を持ってきているので後でお味見ください。

市長：乾燥野菜ですか。

岩さん：そうなんです。ちょっと傷ついていたりすると、それこそセレサモスさんとかでもなかなかＡ品として売れない。ただ、こうやって切ったり、乾燥させたり、それこそ粉末にしてしまうと分からないですよね、素がちょっと傷ついていたかどうかなんていうことは。

どうぞよかったら皆さんお召し上がりください。トマトとか、ネーブルオレンジ、玉ねぎと紫玉ねぎ、ニンジンや梨なんかが入っています。このトマトに関して言えば、市内の立川農園という農家さんでちょっと傷んでしまう前のものをお預かりして、こちらで加工しております。

市長：これ、そのまま食べていいんですか。

岩さん：もちろんです。特にこちらで味つけは一切していないピュアな、切って乾燥しただけのものになっています。

梨に関しては、松屋梨園さんという梨農家さんの、先に落ちてしまったり、青いうちのものですね。乾燥させると甘みとかうまみとかが凝縮されるので、生で食べるにはちょっと味が足りないものもこうやって乾燥させるとうまみが十分になってくる。

あとは、紫玉ねぎで言うと、森正養鶏場さんという、川崎市内で２軒だけの湘南レッドという神奈川県の指定品種を作っているところがあるんですけど、Ｓ玉よりも小さくて、もう出せないよということで、うちでお預かりして機械でカットしています。そのままおつまみにいけるぐらいおいしい。

市長：本当ですね。おいしい。

岩さん：はい。

岩さん：弊社で小ロットの商品加工からできるので、農家さんの思いと、やさいバスを使った南北の流通、それと弊社での加工、また、その野菜を受け取られたこども食堂の皆さんが、例えば、その受け取った子どもや親御さんたちが、農業体験として人手不足の農家さんにお手伝いに定期的に伺うというような、先ほどおっしゃられた三方よしの仕組みがつくり上げられれば。川崎には農家さん、都市農業で１，０００件近くいらっしゃるんだよ、工業のイメージがある川崎でもこういうものが手に入るんだよ、という仕組みをつくれたらいいなと思っているんですけれども、ちょっと私１人だと力不足なので、ぜひお知恵をいただければと思います。

市長：すごくおいしいですね。

岩さん：おいしいですよね。

市長：これ、ドライにしたのを水で戻したりすることも可能なんですか。

岩さん：そうです。おみそ汁を作られるときに乾燥したまま入れたり。あとは私がよくやるのは、玉ねぎとかニンジンとかねぎもやるんですけど、袋にだしとしょうゆを入れて、一晩漬けておくと副菜おひたしができちゃうよ、とか。使い方は本当にいろいろですね。トマトも握り潰すと砕けるので、いろどりとして上からかけていただいたりとか。

市長：なるほど。

岩さん：ポテチもおいしいんですけどね。

市長：面白いですね。

岩さん：乾燥野菜は、まだ世の中的には、どう使うのかイメージが湧かない方が多くいらっしゃるので、もし皆様でメニュー開発とかも一緒にやるとおっしゃっていただければ、私も乾燥野菜を販売するときに、

こども食堂の方々と一緒にメニューを考えて、そういうものをＰＲしていくこともできるかなと思います。

市長：なるほど。これは、いわゆる岩さんがビジネスとして、農家さんから買って、加工して売っていくというふうなビジネスの中に提供できるものもあるという形なんですか。

岩さん：そうですね。今はまだ具体的な話が出ているわけではないんですけれども、例えば、こういう話に協力したいとおっしゃっていただける農家さんがいらっしゃれば、弊社が今買っている価格よりも安く入れていただいて、それを受け取った皆さんが手伝いに行きますというようなことで帳消しにする。そうやって子どもや親御さんたちも農業体験ができるし、どんどんと経験を積むことができる。それが子どもの未来にもつながるのではないかと。

こういった取組は、別に川崎市だけでやらなくてもいいと思うんですよね。今、つながりのある農家さん、やさいバスさんの運営の仕組みがあるんですけれど、県の西側ですね、相模原とか海老名とか、そういったところの農家さんもいらっしゃるので、神奈川県の野菜というものをやさいバスさんとうまく連携しながら、弊社に集荷して弊社で加工、乾燥してしまえばそこから賞味期限は１年２年全然もつものなので、各こども食堂さんたちから、この時期にこれぐらい欲しいなというのに応じて、うちも川崎区小川町ですし、今、ホテル縁道さんとかでご朝食も出させていただいていて納品に行っているので、その道すがらお届けさせていただくということであればできるかと、どうですか、野菜はおいしいですか。

市長：江良さん、どうぞ。

江良さん：ありがとうございます。食料支援の中で一番危惧していたのが、新鮮な野菜をもらっても、１週間もてばいいような状況だったんですね。これがドライになっていて、栄養価が変わらないというのであれば、先ほど言ったポテトチップ感覚で食べられたりしますし、これを少し粉砕した形でみそ汁とかスープに入れたりして、それで栄養補給ができるのであれば、子どもも簡単に安全に食べられるという、すごく画期的な取組を伺ったので、ぜひ野菜作りのときから、子どもを一緒に連れて体験できたらいいなと。やっぱり地産地消で川崎で作った野菜となると、興味関心の幅がもっと広がるのではないかと思って、すごい提案かと思います。ありがとうございます。

市長：ありがとうございます。

鈴木さん、いかがですか。

鈴木さん：僕も初めて食べましたけどおいしくて、ほとんどもう食べ尽くしました。

岩さん：まだ後ろにたくさんあるので。

鈴木さん：先ほどから話題になっていた、食料の確保であったり管理とか、もらえるよといっても取りに行くことの大変さとかもあって、とりわけ、江良さんも話していたとおり、生ものをプレゼントしたいけれど、なかなかそこは難しくて、こういう形だったらまたクリアできて、それもただ渡すだけじゃなくて、食べることによって地域の農業を支えるとか、地域の農家と子どもたちをつなげるまた新しい仕組みであったり。いろいろな可能性というのはすごく感じましたね。

市長：本当ですね。そういう意味では、単純にこども食堂というより、さっき共生食堂というのがありましたけれども、何かつながる食堂という、人同士もつながるし、地域もつながるし、あるいは産業もつながるしと、いろいろなものがつながりそうですよね。そういう可能性を秘めているお話かと思いました。ありがとうございます。すばらしいですね。大竹さん、いかがですか。

大竹さん：おいしく頂きました。結構、乾燥野菜とか乾燥くだものみたいなのは食べることもあったのですけれど、地産地消で新鮮度が違うなというところで、本当においしくいただきました。

私どもも、インスタントラーメンであるとか、そういったものも多く頂くんですけれども、似たような保存食品としては、乾燥されていれば、生ものよりも場所も取らないし、しかも、保存が利いてというところではすばらしいと思いながら見させていただいたところです。

市長：ありがとうございます。

これ、おひたしとかにできるとか、何かすごくうれしい感じですよね。

岩さん：そうですね。そういう意味でいうと、先日、北部市場の(株)ウスイさんという仲卸さんとお話しさせていただいたんですけども、市場でも最終的には廃棄になってしまう野菜もある。北部市場の中でそういった野菜を使った食堂をやってくれないかなんていうご意見もあったので、逆にそういった会社さんにお声がけして、食堂ではないんだけれども、こういったこども食堂とのつながりの中で、そのお野菜をお預かりさせていただくのかなと思って聞いておりました。

市長：ありがとうございます。

さっき、やさいバスという話が出ていたので、やさいバスは県内の野菜を集めて巡回しているというような、この前、ちょっと違うところで聞いたんですけど、それは岩さんがやっておられるのですか。

岩さん：そうですね。

市長：どんな取組か、ご紹介していただいていいですか。

岩さん：はい。もともとは静岡のベンチャー会社さんなんですけれども、地域で、農家さんや、野菜を使いたい消費者さんたち、それは飲食店であっても、個人であっても、スーパーであってもそうなんですけれども、例えば川崎だと、北部まで南部の飲食店が買いに行くと往復２時間かかります。北部の農家さんは、じゃあ、使わせてあげてもいいけれど取りに来てねと言われると、我々が行きにくい中で、じゃあ、バス停という名前の拠点ができて、やさいバスがトラックで走ることによって、農家さんも１５分ほどでそのバス停に届けに行ける。また、飲食店も、自分の飲食店のお店のそばのバス停まで取りに行く。お互いの歩み寄りと地域の方々の思いで運営されているような仕組みになります。

もともとは、川崎市の農政課の方々から、北部の農家さんと南部の飲食、ホテルの方を、お互いに出してもいいと言っているんだけど、どうにかならないかというご相談をいただいて、そのとき、私はお答えできなかったんですけど、いろいろと調べる中で、やさいバスという会社さんがあるということで、社長さんにお電話させていただいて、川崎の現状をお伝えして。そうしたら偶然、もう新百合丘とか、ラゾーナの無印とかを通っていたので、だったら川崎にバス停を作って、同じ流れの中でやりましょうということで、北部の木下農園さんというところ、南部は１件、バス停があったんですけれども、ちょ

っと撤退されてしまって、これからバス停、どこかいいところないかなと考えているところなんですけど、その仕組みが、もっと利用者さんと農家さんの協力者さんが増えれば、広げていくことができるので、そこも含めて。

市長：なるほど。

いや、ちょっと何か面白いですよね。そのやさいバスのバス停があって、そこはいわゆるビジネスの中で成り立っているということですよね。だけど、その仕組みって、何か面白いですね。

同じような話かどうか分からないですけど、そういうような仕組みの中に、佐藤さんがおっしゃっていたような流通だとかの課題みたいなのが解決できる仕組みの、何かお手本になるかもしれないという、可能性があるかもしれないというふうな……。

岩さん：かもしれない、可能性が。はい。

市長：ですよね。ありがとうございます。

それでは、セレモニアの高山さんからいいですか。

高山さん：セレモニアでございます。

私どもは、いわゆるふるさと食堂さんと関わりを持たせていただけるようになったのが約５、６年前。ちょうど私どもの高齢者施設の隣に、黒江さんがレストランをお持ちになっていまして、そちらで、いわゆるこども食堂的なものをスタートされました。

そこの近くだったということもあって、スタッフが配膳のお手伝いだとかという形で、しばらくお手伝いをしていたのですが、やはりお料理を作るのが非常に大変だというようなこともありまして、私どもは仕出し部という部署がございましたので、調理を一部担わせてもらえますかということで、食事の部分に関わるようになりました。

ただ、その後、どうしてもやっぱりお子さんたちが、肉が欲しいということでリクエストがありまして、会社内でもちょっと調整をして考えたのですが、取りあえず鳥のから揚げと、あと、フライ類のものをまず固定で、じゃあ、何とか作ろうということで、今、私どももお弁当の部分になっていますが、鳥のから揚げとフライは私どものメニューの定番ということで提供を続けさせていただいています。

このお話を受ける際、社内でも、やはり継続することの覚悟を、気持ちだけではなく、会社としてもきちっとバックアップするということのお約束をいただけないとご返事ができないということで、社長を含め、皆さんと協議させていただいた結果、やろうということの決定をいただけたので、今はもう６年目を迎えているという形でございます。

ですから、いわゆる関わりというよりは、我々は、どちらかというと、そういった意味では支援という部分のところを細く続けさせていただいているというのが実態でございます。

市長：なるほど。すごいですね。ある意味、完全に地域貢献という形の、すごく持ち出しというか……。

高山さん：はい。

市長：ですよね。

高山さん：ですから、できる限りコストの部分、フードロスの部分も、多少その中には含まれているという

のが正直なところです。ただ、その中で、鳥のから揚げは、もう定番で確定なんですが、２品目に関しては、状況によって変わるということで、そこだけではお許しをいただいているんですね。

市長：ありがとうございます。なるほど、会社で仕出し部があるから、そこの形でご支援いただいていると。これはありがたいですね。これ、会社の中でこういうことをやっているというのは、皆さん、認識されておられるんですか。

高山さん：はい。ふるさと食堂さんに関しては、月に２回、第２・最終火曜日という形で開催がされております。いわゆる活動報告という形で、ふるさと食堂から写真を送っていただけるので、それを報告書ということで社内に回させていただいています。

今、毎回、大体９０から１００を超える食数というのが実情で、うちの社員に関しては、全員そういった意味で社会貢献させていただいているということは認知してもらっていると思います。

市長：ありがとうございます。何かそういうのは、社員の皆さんに伝わることによって、よりその地域の会社も企業市民というような形で、地域貢献していると社員の方が思ってくださると、また違う形で出てくるのではないかと、今やっていること自体も本当にすばらしいことで、本当にありがとうございます。

お肉がという話があったんですけど、実は給食で、何らかの事情で給食が停止になるということがあって、ものすごく食材が破棄されてしまうということで、何とかならないですかと教育委員会にもお願いして、それを無駄にしない仕組みをつくり出そうと、佐藤さんらにもご協力いただいて、この前、初めての事例が出まして。何かいろんな食材が出ていましたよね。

佐藤（由）さん：その仕組みのときには、生ものとかをお渡ししたときに、傷みが早いがものはたしか避けるという形で、日もちのする根菜野菜とか、あとは缶詰のようなものとか、それに限ってということでご相談いただいて、ネットワークに参加しているところにこういう仕組みがあるから、それはそれで登録してねというところで、教育委員会のネットワークに登録してもらうと、教育委員会から、今回、給食を出せないところができましたという案内をしてもらうというふうにしました。

そのときに、業者さんがどこにあるかというのもあるんですけれども、うまくその数が、需要と供給のバランスが合えばいいんですけれども、需要過多になった場合にはどうするんだろうというところもちょっと考えたほうがいいですねということで、それぞれのこども食堂は、どの小学校が一番近いですかというのも一緒に登録してもらって、例えば、川崎区の小学校で、川崎のこども食堂さんが誰も手を挙げなければいいんですけれども、麻生区のほうから来るんだよと言われても、やっぱり地産地消じゃないけれど、やっぱりそこの地域を支えている人たちに還元できるようにしたらどうでしょうかということで、それはいいですねという形で。まだ１回目なので、どうなったかまではちょっと聞いていないんですけど、そんな感じです。

市長：ありがとうございます。給食の取組も全てがうまくいったわけではないんですけど、ただ、このままロスにしてしまうのか、誰かの役に立つかというふうなことで、いろいろな制約をちょっと越えていくという、少しずつ変えることによって、いろいろな人の制約を少しずつ解きほぐしていくと、無駄にならずに済むという取組の１つだと思います。

ですから、今日お集まりの皆さんもそうですし、支えていただいている皆さんが、ちょっとこんなことができるかもしれないというふうな、少し踏み出していただけると、課題の解決の一助になるかもしれないと思います。

今、佐藤さんが言われたのも、まさに仕組みの話で、仕組みはこういうふうにしたらという、またお知恵も井上さんのところでもお貸しいただければありがたいというふうに思っています。

山田さん、どうですか。今まで聞いてこられて、感想みたいなもの。

山田さん：ありがとうございます。この取組をやる中で、やっぱり課題はいろいろあるとは思いながら、ただ、課題があるから動かないというのが、１番懸念されるところで、今、市長がおっしゃったように、ちょっとずつ、課題はあるんだけれどもまずやってみて動きながら、そういった課題を共有していくというところも、すごく大事なのかと思いました。

あと、先日、４月に、川崎市のＳＤＧｓプラットフォームの分科会で、子どもたちへの食料等の寄附スキームという分科会があって、その中でトライアルでまずイベントをやってみようと、子どもたちへの食料の配付をやりました。配付する食料については、市内のプラットフォームのパートナーの３，０００社に呼びかけて、寄附を募ってやりました。

それを行った中で分かったことが幾つかあって、まずは企業としてもこんな取組があるんだという、こういうこども食堂の現状とかもそうですし、寄附をしている活動、企業があるんだとかというのを、知らない企業さんが思った以上に多かった。また、参加してみたいという企業さんも、すごく多かったです。参加してみたいと言った企業さんについては、何をどういうふうに寄附すればいいのというお話がたくさんあって、最初に佐藤さんがおっしゃっていただいたように、おいしい物が欲しいとかもそうですし、岩さんの、生の野菜じゃなくて乾燥の野菜とかというのがあって、ということは、分からないですけど、例えば欲しいものがメニューとしてあって、例えばこういう乾燥野菜のものがあるよとか、はたまた、こういう別のスキームがあるよ、農家さんと連携したこういうものがあるよという、そういったものを、多分寄附をしたい企業さんが、じゃあ、これを使ってこういうふうに寄附しようかなというのが、もし何か選べるようなものとかがあれば、こども食堂の方たちも欲しいものが受け取れて、寄附する企業さんについても、どうすればいいのか自分たちでゼロから考えるというよりは、もう決まったものだったり、実際にニーズのあるものとかを配付できたりだとか、そういったのもあるのかなというふうに思いました。

ちなみに、当金庫も備蓄食の寄附というのを前からやっていて、ただ昔は、乾パンとか、そういったものとかで、多分子どもさんたちは喜んでいなかったのかなというところで、乾パンも最近はおいしいんですけど、個人的には。子どもたちが喜ぶようなカレーの缶詰とか、少しでも食べる子どもたちに喜んでもらうことを最初から考えて備蓄をするというんですかね、そういったのをやっていて、この間のイベントのときも、そういう企業さんがどうしていいか分からないといったところがいっぱいあって、企業さんの状況に応じて、じゃあ、お金が出せるんだったらお金とか、お弁当とかそういったのを買ってとかもありますし、そういったのが継続的にやっぱり難しいというところであれば、じゃあ、備蓄の内容を見直しませんかというお話だったり。企業さんごとに、その辺のお話を１個１個させていただいて、そういったことが広まっていって、いろんな企業さんがいろんな取組をしていくと、いろいろ解決できる部分もあるのかなと感じました。

市長：ありがとうございます。山田さんの話だと、やはり思いはあって、こんなことも何かできないかなと思っている企業さんというのは結構いると。だけど、具体的にどういうふうに、最初のステップを踏めばいいのかというのが、なかなか分からないといったところをうまくつないであげると、可能性は結構出てくるというふうなご発言ですよね。

山田さん：そうですね。その可能性というのは、この間やってみてすごく感じたところであります。

市長：ありがとうございます。

実は、さららさんの、さっき朴さんのお話を聞いていて、ものすごくいろいろな活動をされているというのでびっくりしたと同時に、無理のない形で、例えば、高齢者は早起きだからという。これ、すごくいい話ですよね。

要は、得意分野はみんなそれぞれ違うじゃないですか。だから、企業さんの、例えばフルに働いている方というのは、いわゆるコアタイムって、気持ちはあるけど動けないというのと、いやいや、朝方が強い先輩たちがいらっしゃるというのを、うまくこの地域の中でつなげておられるといったところにとても感動しましたけど、やっておられてどうですか。

朴さん：朝が早いのは、実はラジオ体操グループが地域にはいらっしゃるんですね。そのラジオ体操が終わった後の時間は地域を散歩しているのよ、とかという方たちの声を聞いて。本当に７時、８時の間、鍵っ子なんですよ、１時間。その間に寝ちゃって、学校に行かない子もいっぱい、今までもずっとあるので、行く場所があればいいのかなということで、ここで少し子どもたちと遊んでくれないかなみたいな感じで声をかけて、向き不向きもありますので、やっぱり子どもは無理という方は去っていかれるし、子どもと一緒にゲームするのは楽しいよといって、ずっと来てくださる方もいたりとかとしているので。

そうすると、来なくなっても、子どもたちがお店の前を通ったときには声をかけてくれるんです。もう１年生、２年生ぐらいになると、自分１人でもお留守番大丈夫となったときには、お店の前を通りながら、おはようとかと声をかけていってくれるというのがあるので、これはお互いに仲よしになれるかなということで始めたんです。

市長：ありがとうございます。やっぱりさっきの山田さんの話もそうだし、朴さんの話もそうだけど、自分の得意なところ、できるところというのを、うまくチャンネルをカチャッと合わせてあげることができれば、お互いにとってウインだと。ちょっと何かそこの隙間のニーズがすごく難しい。例えば、食料を配送するとして、中長距離便みたいになっちゃうと、ボランティア様もなかなか難しいとかということになるので。ただ、地域内であれば、ある程度ボランティアさんで活動できる。

だから、さっきのバスストップみたいなものがあると、ちょっと頭の体操みたいな話ですけど、何かそういうのをみんなで、いろいろな立場の方から考え出すと、何か出てくるのではないかという可能性を感じました。

さあ、今までＳＤＧｓパートナーの皆さんを中心に、こんなことができるのではないかということについてお伺いをしてきましたけれども、今度は、２番目のテーマです。そのまま休憩なしで、引き続き行かせていただきたいと思いますけれども、意見交換テーマの２です。

子どもにとって来たくなる場所となるために何か工夫できることはありますかということで、今、こども食堂の運営団体の皆さんには、既にやっていることよりも、こんな協力をしてもらうと、もっとその場が楽しくなるんじゃないかとかというものがあれば、お話をいただけるとありがたいと思っています。

さっき、農業体験の話があって、鈴木さんが面白いというふうにおっしゃっておられましたけど、そういうことですよね。何か食というところから始まるんだけど、食から派生したつながりがあると、もっと多くの輪を広げることができるかもしれないし、価値を高められるかもしれないということもコメントをいただいたので、それぞれの皆さんから、ちょっとコメントをいただいていいでしょうか。

じゃあ、鈴木さんから、おっしゃっていただいていいですか。

鈴木さん:そうですね。さっきの農業ということを僕は何回か子どもたちと一緒に試してみたことがあって、もちろん土とか絶対に嫌だみたいな感じの子ども、都会っ子が多いですから、そういった子もいるんですけれども、絶対ハマる子もいるんですよね。

あと、大川町に金属加工で、僕もこのお話を伺ったこともあるんですけれども、ものづくりについて、めちゃめちゃすごい才能のある子どもたちもいるんですよね。ただ、そういう子どもたちの夢をつなげていくようなところ、なかなか僕たちだけでは難しくて。

なので、僕たちは、やっぱり子どもの居場所として、子どもがここに来たくなって、安心して楽しい場所を過ごせるようにというところは工夫しながら頑張っているんですけれども、いろいろな経験を僕たちだけで準備できるかというと到底無理だし、もちろん、それぞれのご家庭だけで子どもにいろいろな経験や学びをつくっていくということも難しいし、それをいろいろな企業の方とかと、僕たちと、家庭とが一緒になりながら、子どもに豊かな経験を準備していくということが、何かすごく新しいつながりづくりに、またつながっていくのかなという気はしました。

市長：ありがとうございます。さっき朴さんのおもちゃインストラクターという話を聞いて、何それと。おもちゃインストラクター、名称を聞いただけで何か面白そうでわくわくしてきますけれど、それは何ですか。

朴さん：これは東京おもちゃ美術館がやっていることなんですけれども、おもちゃを子どもたちに伝える仕事で、このおもちゃはこんなふうにして遊んだら面白いよ、みたいなことを、東京おもちゃ美術館が養成講座をつくってやっているんですけれども、結構意外に地域にいらっしゃるんですね。

市長：おもちゃインストラクターですか。

朴さん：はい。おもちゃが大好きという方、いらっしゃるんですよ。あと、木育で興味を持ってという方がいるので、そういう方たちとの出会いもちょっとあったりして、じゃあ、ぜひ場所を提供しますから、子どもたち向けにやりませんかということで始めていたんですけれども。

そうしたら、むすびえさんが、何と東京おもちゃ美術館と一緒におもちゃ配付ということを去年されて、毎年やっているんですかね。手を挙げてみたら、当たったんですね。おもちゃが来たんです。本当によかったんですけど、すごいですよ。十何万ぐらいのおもちゃが来て、しかも貸し出していいんです。

なぜかというと、実は、おうちの中にあるおもちゃって、結構ゲーム系が多かったりとか、想像力を豊かにするおもちゃより、ゲームしてねという感じのもので、なかなかそういうものは、木のおもちゃは高くて手が出ないので、ママたちはいいなと思っても買ってあげられないんですけど、それを借りることができるというのは、本当に安心して子どもと遊べるので、それを今こども食堂の日に貸し出しています。

もともとインストラクターがいて、月一のおもちゃ広場をやっているので、そのときにも一緒に遊べて、今度借りるときは、こども食堂に来たら借りられるよ、というふうに、こども食堂にちょっとつなげたりとかしながらしてやっていますけれども、とても面白いです。

市長：面白いですね。

朴さん：はい。一応、こども食堂で使ってくださいということなので、別にうちじゃなくてもいいと私たちは思っていて、子どもが集まってくる江良さんのところとか、健さんのところも、日にちが違いますの

で、言っていただければどんどんお貸しして使っていただいたらいいのにと思っているんです。

市長：なるほど。それもシェアできるんですね。

朴さん：はい。多分、こども食堂でということしかないんです。うちじゃなきゃいけないことはないと思うので。

市長：なるほど、貸出しか。それは全く思いつかなかったですね。

実は、もう１つ、もったいない話で、「市長への手紙」でこども文化センターのおもちゃが古いと。新しいのを買ってほしいというものがあって、結構要望が多いだろうなと思ったんです。

ただ、家の中には、きれいなまま残っているおもちゃはたくさんあるはずだろうと思って、これ、呼びかけられないかと。わざわざ新しいものを購入というよりも、また遊んでねという感じで、地域で回せないかというのを、ちょっと考えてもらったんです。これ、どうにかできませんかと。

そうしたら、ジモティーというサイトを知っていますか。ジモティーが協力してくれて、市民の皆さんに、こども文化センターから、こういうものが欲しいですと。要らないものが来ると大変なので、こども食堂と同じように。こういうものが欲しいと言ったものに対して、どうですかと呼びかけて、ありますというのでつながって、今、こども文化センターで、結構新しい備品がそろっているというのが始まっているんですよね。

だから、実は今、そうか、貸出しか、横のシェアみたいなのって。だから、曜日もずれているしということであれば、あれもできるのかと。やっぱり、仕組みじゃないですけど、なかなか皆さんに呼びかけて、どうですかといっても、気持ちはあるけどどうなのといったときに、ジモティーが真ん中に入ることによって、つながったという一例なんです。だから、また朴さんの話を聞いて、ちょっとアイデアが広がりますね。

朴さん：本当に、あるものをみんなでシェアしていくということができればいいのかなということ。今、お伺いしながら、例えば頂ける、こういうものが届きますよというのはあるんですけど、実際、地域でこれがなくて困っているというのは、どこに声を出していいのかが分からないとか、今、ミルクで困っているんですとお母さんがいらしても、ミルクをくれるところはどこなんだろうみたいな、もうそこで困って、ストップしてしまうとか。

もちろん口コミで声をかけていきますけれども、私たちが必要なものを、こんなのが欲しいんですというところがどこかが拾ってくださって、それを広めて、じゃあここにあるよというのがあると、またそれはそれで、逆のパターン。佐藤さんから頂くのと逆のパターンの仕組みがあると、何かもうちょっと地域のニーズに合ったものになるのかなと。おむつを欲しいと言われても、今、おむつはちょっとないねという感じで。

市長：江良さん、どうですか。

江良さん：子どもが集まる仕組みをつくるというところですよね。２年前ぐらいの体験で、ちょうど中庭があったので、バスケットゴールを試しにつけてみたんですよ。そうしたら、すごくありがたいことで、平日は来ないんですけど、中学生、高校生が、特に親御さんと一緒に遊びに来てくださったりというようなところで、以前ここのこども食堂に、僕、来ていたんだということで、初めてお父さんに紹介してもらったりして。そのお父さんが、いや、こんなゴールを造ってもらったりしてすまないから、何か、

少し勤労奉仕じゃないですけど、ちょっと畑があるから、畑を耕してくれたりなんていうことでつながってきたりとかですね。

やはり、うちもいろいろなことで子どもにアンケートを取ったんですけど、１番の大人気は何だと思いますか、皆さん。

市長：何だろう。

江良さん：当然、体を動かすことです。鬼ごっこです。鬼ごっこ、これが１番人気です。だから走り回れるだけのスペースがないと、危なくてしようがないんですけど。だから、たくらみとしては、少しアスレチックができるようなものとか、粗大運動ができるようなものを準備ができたらいいかな。それによって、子どもがちょっと集まれる部分になるかなというところですね。

あとは、コロナ禍は特にそうでしたけれども、子どもは、非常に大人を求めていましたね。お父さん、お母さんがお仕事に行っちゃって帰ってこない。または逆に、お父さん、お母さんがもう近しいところにいるというので、父ちゃん、母ちゃん以外の人と会話がしたい。学校もないじゃないですか。なので、両親以外、学校の先生以外の大人を求めているというのが、すごくニーズとしてあったと思うので、そんなところがこども食堂をやっているついでに、ちょっと立ち寄ってもらうとか、どうしたのと声をかけてもらうというようなことで、地域の人が気にかけてくれるような場になると、もっと身近な共生の食堂になってくるかと思っていますし、やはり共生食堂だけじゃなくてそれ以外で何か活用できる、皆さんが集まれるような場になればいいなと、常々思ってはいるんですけど、活用の仕方をもう少し地域の方から意見を募った形で、使いやすい施設にしていきたいと思っているんですけれども。

市長：ありがとうございます。いや、食というものから始まるんだけど、食だけではない、その支援というか、かみ合わせ方というのがあるというのは、それだけでも、パートナーがぐっと広がってきますよね。この前も、麻生区でやった車座集会で、それは公園の管理みたいな話を、どうしていこうか、企業の皆さんもどう関わってもらうかみたいな話であったとき、いろいろなアイデアが出ていて、うちの会社には、虫に詳しい人がいるだったかな、さっきのおもちゃインストラクターじゃないですけど、こういう専門家がいて、子どもたちにこんなお話をできますというふうになると、それだけでも面白いとか、あるいは、ある結構大きめの公園で、自分たちでシイタケの原木栽培みたいなのを一部の地域で、この区画でやらせてもらえないかと。地域の人たちとみんなで栽培して、それを子どもたちと収穫体験をやると、面白いですよねと。それを会社としても協力しましょうみたいな話もあって、そういうやり方もあるんですかというような。

これは公園の話ですけど、公園と人をつなぐというので、企業としてどう関われるかというのは、実は、今、江良さんがおっしゃったように、いろいろな遊ばせ方もできるし、こういうノウハウみたいな人材での協力というのも、あるいは場の協力というのもあるかもしれないしということを考えると、食から始まる、もう少し大きな広がりで、地域がつながっていくというのは、何かすごく今、ヒントをいただいたような気がしますね。

佐藤さん、いかがでしょうか。社協としていろいろな方たちを見ていて、地域をつないでいただいている立場から、ちょっとコメントをいただければと思うんですが。

佐藤（祐）さん：そうですね。今、皆さんからもお話があったと思うんですけど、川崎区内、こども食堂だけじゃなくて、私たちの関わりの深い地区社協さんとか、地区民児協さんは、こども食堂まで行くのは、ちょっとどうしてもハードルが高いというお話もあったりして、でも、やっぱり皆さんは思いを持って

いらっしゃって、コロナ禍で子どもたちが苦しい状況にあったりとか、ご家庭の中が厳しい状況にあったりとかする中で、自分たちで何ができるかというところで、子どもの食料支援という形で、今、誰でも来られる形で食料をお渡しする活動をしていただいている地域が、川崎区内で言うと５、６地区に広がりつつあるんですけれど、ただ、どうしても渡すだけのつながりでは、うまく交流が図れていかないので、皆様のお話にもあったような、何かそこで体験をさせてあげる機会だったりとか、一緒に遊ぶ仕組みをつくっていく中で、上手に子どもたちと交流を図っていけたらいいなというところで。皆さんのアイデアとか、持っているお力をシェアさせていただけたらありがたいと思っていたのと、あと、今、朴さんからお話があったとおり、ミルクとかが欲しいというお声を、本当は多分うちがもっとちゃんと宣伝しなきゃいけなかったんだろうなと反省しているんですけれど、言っていただければ、全部が全部を対応できるわけではないんですけれど、うちが持っている社会福祉法人施設さんとかのネットワークで、保育園さんとかとのつながりがあるので、実は粉ミルクのサンプル品とかをくださいとか、おむつがあるよと言うから、どこか社協でまいてくれないかというようなことで今までにやらせていただいていたこともあったので、うちの周知不足だったと反省をしていたところです。

市長：そうなのかという感じはありますね。なるほどですね、さすが頼れる社協。

確かにそういうふうに、ちょっと社協さんに一言、言ってみると、あるかもしれないという、どこかにつながるかもしれないという話ですよね。

実は、コロナ禍の生理に関する貧困がありましたでしょう。私たち、ただ、生理用品を配るということではなくて、やっぱり厳しい状況にある方というのは、別に生理の問題だけではなくて、ほかのところにいっぱい課題があるということなので、それをお渡しすると同時に、やはり次につなげていく、支援だとか、必要なものにつなげていくためのツールにしようという話を、男女共同参画センターと一緒になって取り組んだんですね。それは、ただ渡しただけでは、その後つながらないという。

先ほど、どなたか、鈴木さんだか、江良さんだったかが言われていたように、いろいろな情報が集まってくる、その環境だとか、もっと、ただ御飯だけじゃなくて、いろいろな情報で、あ、こういう状況なんだな、こういう支援が必要なんだなといったら、そこでちゃんとアセスメントできるようなところに、社協さんだとか、かなり厳しい状況であれば私たちの行政にというのもあるでしょうし、そういう場がつながって、必要な支援だとか、もうちょっと幅広に展開していくことができる。

だから、本当に最初こども食堂から始まったのが、いろいろな意味で地域の居場所としてとっても大切な場になってきているというのが、何というかこども食堂の変遷の過程なんじゃないかという気がしますけど、佐藤さん、いかがですか。

佐藤（由）さん：市長のお話はごもっともで、今も社協から言っていただければということがあったんですけれど、私、自分でもこども食堂をやっていて、そこには、やっぱりいろいろな方たちが来ている。コロナ禍で完全予約を取ることによって、シングルマザーであったということが分かったりして、民間団体なので、その人だけちょっとえこひいきして、完全に予約が取れるようにしたりとか、それは民間団体だから、市民団体だからできること。それは、任意のいいところ、市民団体のいいところだと思っています。

その中でいろいろな困り事とか、これをどこに逆に相談したらいいんだろうというところも、やはり来ている方たちはいっぱいあると思うんですね。でも、お役所にまで行って聞くと待たされるし、何かすごい面倒くさくて嫌なんだけどというのが純粋なる市民の声だと思うんです。

県内のほかの市域では、ケースワーカーさんが必ずこども食堂に来ていて、一緒に何かやってくれるというところがあるんですね。川崎は、対人口から見なきゃいけないことが非常に多くて大変だという

ことは、よく分かってはいるんですけれども、例えば重点的に川崎区からとか、そういうニーズが高そうな地域から、例えば市営住宅の近くでやっているところからとか、あとはサンプルで各区で何か所からでもいいんですけれど、そういうところでやるときに、ケースワーカーさんに来ていただいて、一緒にその来ている人たちの様子であったりとか、あとは、運営者から、何かちょっと困っていることがいっぱいあるみたいというのを聞いてもらえるように、まずはしていただけるといいのかなと思います。

あと、つい最近のケースでは、食料をどこからもらっていいか分からないといって、横浜市の金沢区の団体にＳＯＳを打った方がいるんですね、川崎区在住の方で。ちょっとそちらのほうに食料を取りにいくというので、お話を聞いたんですけど、持家があるので、生活保護の申請をしに窓口に行ったんだけど、おうちがあるからねと言われて断られた。何とかもうちょっとできないのと言われたんだけど、現状として、働けるような家族構成ではなくて、とにかく欲しいんだということなので、私が知っているところを紹介しますねといった感じで、今、そこで終わったというか、とどまっているんですけど。

そういうのも、例えばケースワーカーさんとかが一緒に来て、お役所の窓口ではなくて、もうちょっとリラックスしてお話ができるような環境であれば、いろいろな支援につながれる、正しい支援につなぐことができるのかなと思いました。

市長：ありがとうございます。いや、いろいろな相談窓口があるんですけど、相談窓口のハードルが非常に高いということは、僕たちもすごく認識していて、なるべくアウトリーチしていこうというふうな考え方でおりますので、非常に大切なご意見をいただいたと思います。

また、市役所、あるいは区役所のところだと、どうしても制度の中でやると、公平性とかというふうなことがある中で、ある意味でそれだけではなかなか解決できないところというのを、民間の団体の皆さん、まさに皆さんのようなところがうまくそこをつないでいただいているから、ある意味でもっている部分というのは多分にあると思っています。そういった意味では、さらにうまく行政と一緒にやっていくという、その思いでやっていきたいと思っています。すばらしいご意見、ありがとうございました。

さあ、澄川さん、いかがでしょう。やっぱり、弁護士の先生でいらっしゃるので、いろんなことを思うことというのは、お仕事上はあるのではないかと思いますけれども、そういう立場じゃなくてもいいんですけれど、何か感じておられることはありますか。

澄川さん：こども食堂自体、あまり仕事柄、直にということではないんですけれども、弁護士になって若い頃は、割と少年事件といって、川崎は今治安がよくなって大分少なくなっていますけれども、かなり、バイクを乗り回しちゃった少年とか、そういうのを警察署であったり、あるいは、裁判というか審判まで面倒を見たりということをやってきていて、やはり、いろいろな意味で大人とのつながりがない子ども、あるいはきちんと社会生活を送っている大人とのつながりがなかなか乏しい子というのが、目についたというのを思っています。

そういう子ども、捕まっている子どもと話しているときも、最終的には、この子はどうやって仕事をして生きていくのか、やはりそういうことを考えていくんですね。そうなると、こども食堂というのもやはり家族以外の大人と交わる場という意味で、子どもがきちんと大人になって成長していくためにはすごく貴重な場だと思っています。

それとの関連で、僕の知り合いの友達の塗装業者さんが川崎区にいまして、コロナ前から子どもを集めて塗装体験とか、ペンキ塗り体験とかをやっているんですね。まさにそういうのを、いろいろなことを組み合わせていくと、いろいろな大人と知り合えたりして、さっきおっしゃっていた想像力がある子とか、ものづくりが得意な子とか、長所を見つけて、いい仕事、やりたい仕事が見つかったりとか、さらに今そういう業者さんもこぞって人手不足なので、そういうところの解決も、ひょっとしたら少しつ

ながっていくかなとか、そのような期待もちょっと持っていたりします。

市長：ありがとうございます。すばらしいご意見をいただきました。

鈴木さんも、先ほどおっしゃっていましたよね。ものづくり、ものすごく得意な子がいるとか、そういったところが、将来みたいな話というのを、目標を見つけられて、何か頑張れるみたいな、そういうのがあると、また違った形になっていくと思うので、そういう意味では地域の事業者さんで、あ、それなら協力できるかなというふうに思ってくださる方を、繰り返しになりますけど、どうやってマッチングしていくかというところが１番キーなんですけれど、そこが１番難しいところですけどね。

朴さん、どうぞ。

朴さん：商店街がどんどんなくなってきているので、実は専門家がいなくなってきているんです。あと、昔は川崎は町工場がいっぱいあったんですけれど、どんどんなくなってきていて、なので子どもが専門家に会うことがないんです。

おもちゃも壊れたらおしまいなんですよ。お父さん、お母さん、直せないですから、もう、じゃあ、しょうがないね、買うかという話になるんですけれど、これを直してくれるすてきな大人がそばにいたら、子どもたちは、ああやって直すのかとか、できるじゃないですか。あ、ねじをこうして回せば、中を見ていいんだと。私たちは機械に弱いですから、触ってもっと壊したらどうするんだというふうに思っちゃうんですけど、実は触って開けたら直るものがいっぱいあったりだとか。そういうことを地域の中でイベントとして私たちみたいな団体が開催して、そこに専門家さんが来てくれるようなことがつながれれば、もっとすてきな大人たちとか、もっとすてきな、自分の特技を生かすことのできるものがあるんだと。夢を語れない子がすごく多くなってきているので、あ、こんなことができるんだということを知る体験の場所が、私たちみたいなところからお知らせすることができて、そこにいろいろな技術を持った方たちに来ていただく。農業体験もそうだし、さっき金属の加工と聞いたときに、もうそれはやってみたいなとすごく思ったんですけど。

そういうところのつなぎができると、すごくうれしいかなと。私たちは子どもを集めることはできても、子どもに専門的なことを伝えることはできないので、そういうところの人材と子どもとをつなげるような橋渡しをしていただけるものがあると、すごくうれしいと思います。

市長：ありがとうございます。

佐藤さん、どうぞ。

佐藤（由）さん：今の話で、誰がやるというところは置いておいてなんですけれども、それがないと駄目という話もあるかもしれないのですが、夏休みは、皆さん、やっぱり子どもたちの宿題をやっていかなきゃいけないというところがあって、そこに、たしか川崎はマイスター制度というのがあって、専門家の、ものすごく専門知識を持った方たちがいっぱいいらっしゃる。

片や、後継者にも悩んでいらっしゃるというところもあるので、そういうマイスターの方たちと子どもたちが集まる場所をつくって、子どもたちは、何をやりたい。例えば、木を削ってみたいとか、薄いのもあって、すごいなと思って見るとか、はんこを彫っていて、何かちっちゃいところをいっぱい彫って自分のはんこを作って帰れるとか、そういう実体験を基にしたイベントを、川崎市さんで、例えばカルッツかわさきでやるとか、等々力でやるとか、大きな会場で、そこでついでに、じゃあ、プロスポーツチームの２軍、３軍とか、あとコーチの人たちに協力してもらって、大逃走中を仕掛けてみるとか、何かそんな一大イベントがもしできたら、何かまるっと解決するかなと、今、ちょっと思いました。

市長：実はですね、これはやっているんです。

佐藤（由）さん：やっていますか。

市長：実はマイスターまつりというのをやっていて、１年に１回とか。あるいは、つい２週間ぐらい前に、溝の口の駅前の自由通路を使ってマイスターの皆さんが集まって、こんな技術ですと紹介したりとか、あるいは、小中学校に対する講師派遣みたいな形で、市内の技術の連合体というのが、今、７０職種以上の皆さんが集まったところで、小中学校に、例えば美容師さんだったら体験をさせてくれるとか、そんなこともやっているんですけれども、それが学校だったりとかになるので、地域の中に必ずしも落ちていっていないのかなと思います。

　あるいは、いろいろな地域人材で言うと、寺子屋を今やっていますよね。寺子屋の体験プログラムの人たちが、講師リストというのが結構いっぱいあるわけです。そこにちゃんとにつながっていくと、いろいろな面白い人たちがたくさん地域にいるので、そういう人たちも、むしろもっと共有してもいいと思いますね。そこは、教育委員会とうまくこういったところで連携できるような、例えば、川崎区だったらこういう人がいますよというふうな形でいくと、先ほどのご要望にももう少し細かく対応できるのかと思いますね。

佐藤（由）さん：マイスターまつりがあるのは知っていたんですけど、あそこだと通路で見て終わりみたいになっちゃう感じ……。

市長：まつりはですね……。

佐藤（由）さん：おまつりは違いましたっけ。

市長：違うんです。建物の中で、ものづくり体験をやったり、例えばタイル貼りをやったりとか、工作だとかと、いろいろやっています。壁塗りとか。

佐藤（由）さん：それをもうちょっと子どもとか地域の方が参加しやすい形で、主催をもうちょっと変えて、同じことをやるにしても、タイアップにしても、何かそういうふうにできるといいのかなと思ったというところと、あと、ちょっと話がずれるんですけど、資源という意味だと、きれいなんだけど使えるランドセルとか、制服とか、何かそういった部分の活用がうまくできたらいいと思っています。

市長：ありがとうございます。結構これも教育委員会で、学校ごとに制服とか、かなり回していますね。特に中学校に入るときは、学校単位でかなり、ほぼ全校でやっているのではないかと思いますね。

　ランドセルについては、ちょっとまだそうでもないのかもしれませんけれども。ある意味、もう少し知ってもらうという活動が必要かもしれませんね。ありがとうございます。

鈴木さん：何か今まですごくつながるというところであったりとか、コロナ禍でこども食堂とか、ＳＤＧｓということをキーワードにして、いろいろな新しいつながりができてきて、何かそこに希望も見いだすことができて、何かそれがいいなと思うんですけれども、一方で、人の孤立みたいなところは、やっぱりすごく深刻で、相談したいけれど相談ができないみたいな人たちも多くて。

そこを僕たち、社協とか、江良さんとか、いろいろな方々と一緒になって、やっぱりそういう孤立している方々と、いかにして出会うかと、出会うための仕組みづくり、そして、同時に支えるためのチームづくりという、そこを合い言葉にしてこの３年間、いろいろな地域展開をしてきて、今あったような話も含めて、僕たち、今まで福祉的なところで何かそういう出会うための仕組みと、支えるためのチームというところを、福祉的なところだったんですけれども、そこに、次、一歩というところが、やっぱりさっきもちょっと話があったまちづくり。福祉とまちづくり、福祉×まちづくりが進んでいくと、きっとまた新しい川崎の姿みたいなところが生まれていくと思うんですね。

今日は何かいろいろあったところで、すごく福祉的なところと、あとは企業の方々と、何かまた新しい次の一歩が進んでいくと、きっとまた楽しい川崎区みたいなところができてくるんだろうなと。今日、すごく何かわくわくしているんです。

市長：ありがとうございます。

いや、冒頭に申し上げたように、地域包括ケアのところは、要するに福祉といったら、いや、うちは関係ないとなっちゃうけれども、地域に提供するサービスというふうに考えれば、結構うちもやっていますというのがあるし、入り口は、例えば食料支援から始まったけれども、それだけじゃない、うちにはこんな人もいますという形で広がっていくと、何かおっしゃるように、まちづくりとして、いいものにどんどんなっていくのではないかなという、今日、皆様のお話を聞いている中からも、とても感じることができました。本当にありがとうございました。

大分、時間になってまいりましたので、ここは言っておきたいという方、いらっしゃいますでしょうか。ちょっと一言、言っておかないと、と……。

はい、どうぞ、朴さん。

朴さん：システムというものに大変弱いので、実はこども食堂の予約を受け付けるのがすごく大変なんです。みんな受けたら何百食も作らなきゃいけない。ここはすごくたくさん作っていらっしゃるんですけど。そこまで力がないので、１００で抑えたいとかと思っても、いろんな人が、この人から幾つ、この人から幾つ、この人から幾つというのをまとめたら、１３０とか４０とかになっているみたいのが続くんですよね。

それをもっと簡単にできる方法を誰か教えてくれないかなと。でも、みんな携帯は使えるけど、それを計算して集計するなんていうことは全くできないですし、やっとフォームというものを知って、あ、これをすればちょっと楽かもしれないと。これは、きっと企業さんのほうのがすごいよく分かっていらっしゃるのではないかと思うので。

市長：もう、すぐできると思います。

朴さん：そうなんですか。ここは、紙で申込みをしていますからね。もう本当にすごく大変……。

澄川さん：すみません。システムの人でもないんですけれども、まさに私がその食事の配付をしたときに、そこがやりきれないなと思ったんですね、自分が仕事をしながら対応するのは。そこで、いろいろと探して、イベントの予約サイトというのがあって、名前を言っちゃうとＰｅａｔｉｘというのがあるんですけれども、そこでチケットの数を設定して販売、販売というか無料なんですけれども、申し込んでもらうことができます。スマホを持っている方であれば、かなり簡単に申込みができます。

そこで、ある人は４食、ある人は２食といった形で名前を書いてもらって、それが最終的には表とし

てダウンロードできますので、多少パソコンを使える方が管理していただければ、そこはかなり簡単に、しかも無料で使えるということはあると思います。

市長：ありがとうございます。ご紹介いただいて。
江良さん、どうぞ。

江良さん：鈴木さんが、福祉とまちづくりを掛けるというと、当然そのとおりなのですけれど、まちづくり、地域づくりを考えたときに、本当に、これはあまり言っちゃいけないんですけれど、皆さん、高齢化してきているんですよね。なので、地域の支え手をどう支えるか、次の支え手をどうつくるかということを考えていくのが、どこの自治会、町会でも課題なのかなと。
ましてや、こども会も組織できないような、子どもの数も減ってきているとなると、どうしても福祉的な要素に偏りがちなんですけれども、そこだと将来的なところの灯りがちょっと見えづらかったりするので、そこにどういうふうに光を当てていくのかというところは、我々福祉の人間ですと、なかなか光を当てられないので、そこはＳＤＧｓパートナーを含めたところで、やっぱり企業さんが少し一緒にこの光を見てみようというような示唆をしていただき、お知恵をいただけるとすごくありがたいと思って、切実な問題で取られています。
なので、朴さんのところのように、やっぱり元気な高齢者に、どう地域の中で活躍いただけるかという、そういう意味での仕組みを、みんなで考えていかなくてはいけないと、今日改めて、お話を伺って考えさせられました。ありがとうございました。

市長：ありがとうございました。
区長、もうまとめに入らないといけないみたいで。

中山区長：ありがとうございました。今日、最初から聞いていまして、非常に、こんな言い方をするとあれですけれども、楽しいというか、可能性が広がって、５年前、先ほど、冒頭もありましたけど、５年前に同じテーマでやったとき、あのときは、鈴木さんとか、江良さんとか、その当時やられた方と、これからやろうとしている方というようなお話でしたけれど、今回はまたさらに一歩進んでというか、川崎区ならではといいますか。川崎区は先ほど企業さんはだんだん減っているとは言いましたけれども、７区の中でも、やはりかなり企業さんの数が、大手もそうですし、中小の方も非常に多く事業所がある区域になっていますので、区役所でも、そういった企業市民というふうにうたって一緒にコラボしながら事業をやっているということもあって、今回は、そういった企業さんを含めた方々とこども食堂をやられている方々の意見交換、ディスカッションしていただいて、さらに可能性が見えてきて、区役所としても、まだまだやれることがあるといいますか、先ほど、いろいろなイベントみたいな話もあって、マイスターの話もありましたけど、既存でやっているイベントを、今までやってきた場所を少し変えるだけでも、例えばＡ食堂さんとかというふうに変えたりとか、そうすると、今までやっている市だったり、区だったりとかの企業さんかもしれないですけれども、プラスアルファでやるんではなくて、少し今回はここをやってみましょうとかということで、それぞれの負担が軽くなったりとか、それでお子さんはすごく楽しめるとかですね。
先ほどの次世代じゃないですけれども後継者みたいな話があって、先の長い話かもしれませんけれど、今、食堂さんに来ているお子さんが成長していって、こういった自分が楽しめる場所があるのを認知してもらって、やっぱりこういうのがあったほうがいいよねと、そういうお子さんたちが成長していって、自分がそういうことをやってみたいとかですね、そうなったら本当にすばらしいというか、かなり理想

の話なのかもしれませんけれど、でも、こういった地道な積み重ねで、そういう先のすごくすばらしいところが描けるのではないかと今日は感じました。

区役所としても本当にいろいろまだまだやれることがあるのではないかという、私があまり言うと、またいろんなところから怒られるかもしれませんけれども、そんなことを感じさせていただいた、今日は短い時間でしたけれども、本当に楽しかったですし、本当にありがとうございました。

市長：ありがとうございました。

最後、私のまとめということになっているので、お話させていただきます。

ＳＤＧｓパートナーが３，０００社を超えたということは、やる気のある方というのがこれだけいるということ、だけど、どうしていいのか、まだ分からない方というのが、圧倒的多数いらっしゃるということなので、自分の得意技はどういうものだということを出していくと、どういう組合せを、座組みをすれば、あ、こういうパターンになるかな、そういうパターンになるかなということが見えてくるのではないかと思うので、事務局としてもしっかりとやって、これからもつなげていける、コーディネートできるような形でやっていきたいと思います。それは市であったり、区だったりとかという形でなっていくと思いますけれども。

それから、最後、希望を私は見ているということをお話ししたいのですが、実は川崎区内の中学校で、寺子屋の中学校版をやっているところがあって、そこを見てきました。そうしたら、若い人たちがすごく入ってきてくれているんですね。教える、寺子屋先生として。そこも、その中学校出身の高校生、その中学校出身の大学生、そして、そこの中学校出身の社会人というふうな形で、若い世代が自分の後輩の勉強を見るというところに入ってきてくれているというのは、もう本当に希望の光を見るようでした。

それまで大分年配の教員ＯＢだった先生が入って、頑張ってくれていたんですけれども、そこにプラス若い力が入ってきてくれているというのは、すごくいい形になってきているなと。

それから、２、３週間前、看護大学、川崎市の看護短大が四大学化しましたので、９０分の講義をさせてもらったんですけれども、地域包括ケアについてお話ししたんですね。そうしたら、自分たちでどんなことができるか、ちょっとコミュニティの一員として考えてみてと言ったら、学生さんたちは１年生ですけど、すごくいろいろなことを言ってくるんですよね。その中には、自分も川崎ではないんですけど、大学に入るために川崎に来ました。地元で、親と一緒にこども食堂を手伝っていたので、川崎でも継続してやってみたいと思いますとか、そういう声もありました。

何か人とつながるために、どうしたらいいのかというのは、実に若い人たちは考えているので、そこをうまく、いろいろなことがありますけれども、私たちのコーディネートの力というのが、本当に大事なんだと思いますが、江良さんから、大分、高齢化してきているというお話もありましたけれども、うまくマッチングしていくと、さっきのような中学校での若い人たちが入っていくという、何らかのきっかけなのだと思います。

そのきっかけが今日だったり、今日お集まりいただいたＳＤＧｓパートナーの皆さんだったり、今日、参加していないパートナーの皆さんたちというのがたくさんいるので、そういう人たちとうまく私たち自身がつながっていくということができれば、決して悲観するようなところではないと思って頑張っていきたいと、皆さんと力を合わせていきたいと思っています。

こども食堂が持っているこの潜在的な力というもの、皆さんの活動のおかげで成長してきたと思いますし、それがさらにいろいろな人たちを巻き込んで、スパイラルアップできていけたらいいと思っています。

短い時間でしたけれども、皆さんから大変すばらしいご意見を頂戴して、次に私たちは生かしていけるというふうに思います。本当にありがとうございました。

司会：皆様、２時間にわたりありがとうございました。以上をもちまして、車座集会を終了とさせていただきます。本日は、ご参加いただきまして誠にありがとうございました。